

10月24日に新渡戸文化小学校で行われた探求コーディネーター研修は、大変示唆に富むものであった。研修後、肩の荷が下りました。

印象に残ったこととして私たちは、探究を始めるにあたって、いろいろな〇〇するべき？という固定観念に縛られすぎではないかということ。

例えば、次年度からシブヤ未来科が始まるにあたり、何か新しい単元を創出するべき？（本校の先生は、あまりそれはないかも）あるいは、探究学習なんだから自ら課題を設定すべき？ 問いも自分で立たせるべき？ プレゼンテーションソフトを使って発表するべき？ などなど

でも、探究には、いろいろな段階があるそうです。以下の通りです。

4つの探究のレベル	① ② ③		
	問い	プロセス	結論
1 確認としての探究 (Confirmation Inquiry)	✓	✓	✓
2 構成された探究 (Structured Inquiry)	✓	✓	
3 ガイドされた探究 (Guided Inquiry)	✓		
4 オープンな探究 (Open Inquiry)			

(出典) The Many Levels of Inquiry By: Randy Bell and Heather Banchi より和訳

1から4に従ってだんだんと自由度が高くなっていきます。（高度になっていきます）

1からスタートして4を目指すといったイメージ

4つの探究について

1 確認としての探究

いうならば探究の初級編 ①の問い、②のプロセス、③の結論も定まっています。例をあげると、教科書に基づいた理科の実験などでよくある、問いも実験手順のテキストで示されており、すでに示された手順を追うようなものです。

2 構成された探究

これは、①の問いや②のプロセスもある程度教師のほうが見通しを立てます。単元を探究のサイクル（※注1）の中で学ぶため（探究の手順に慣れさせるため）、あらかじめスタート時点である程度デザインされています。「確認としての探究」との一番の違いは、児童が可能な限り探究のサイクルを自分で回せるように、教師は①②の環境設定はするけれど、③の結論は、児童に出させるように仕掛けることです。ちなみに新渡戸文化小学校の探究はほとんどがこれだとお話になっていました。これは、シブヤ未来科で先生たちもやっていますよね！！

3 ガイドされた探究

この段階になると自由度が高くなってきます。こちらは領域や軸はある程度決めておくが、プロセスがオープンであり、子どもたちの興味によってダイナミックに探究が動いていくところが前出の2と大きく異なる点です。

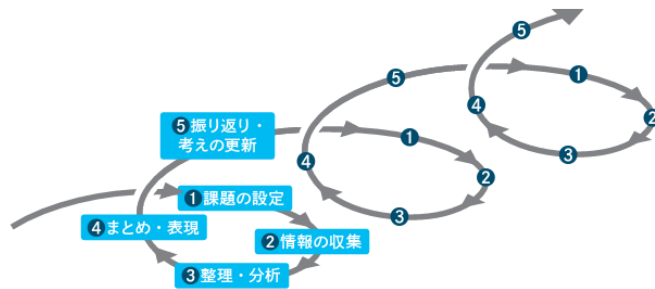
4 オープンな探究

これはほとんどの先生方が抱いておられる探究の最終形です。自分で課題を設定 問いを自ら立て、そのアプローチの仕方も子供自身で選択して、結論を導き出すというもの。新渡戸では今年度3年生と6年生がこれにチャレンジしているという話でした。

探究といっても様々なステージがあります。幼稚園児に体力向上のためいきなり校庭10周させますか？それは、来年度から、いきなり4のオープンな探究をしようとしているのと同じようなものです。

つまり、児童の実態があり、発達段階もある。それに応じた探究を計画していくということが大切ということです。

図1 探究的な学習における学習の進め方



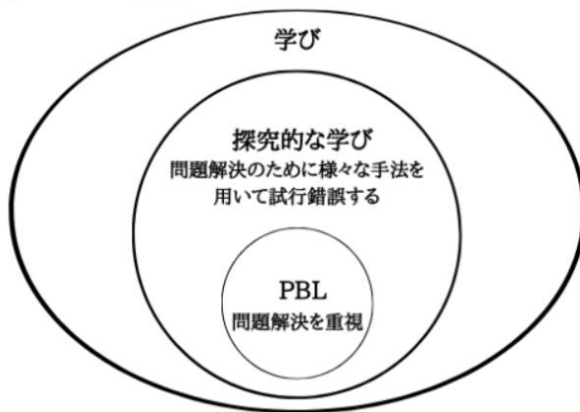
注1 探究のサイクル

2年前 本校の総合的な学習の時間の研究発表の研究紀要にも示されている図です。当時研究に参加していた先生は、「ぐるぐる図」って言ってましたね。

探究のサイクル図を上にも示しましたが、本校の総合の研究でやってきたことです。何が言いたいのか。それは、まったく新しいことをするというのではないということ。繰り返して言っていますが、先生方は、授業の中で探究的な学習をしてきています。それは、授業観察のシートにも示されていることです。

誤解を恐れずに言うのであれば、問題解決型学習と探究学習はほぼほぼ同義と捉えて間違いありません。下の図を見てください。PBLとは Problem Based Learning の略で日本語で問題解決型学習のことを指します。

探究学習とPBLの関係



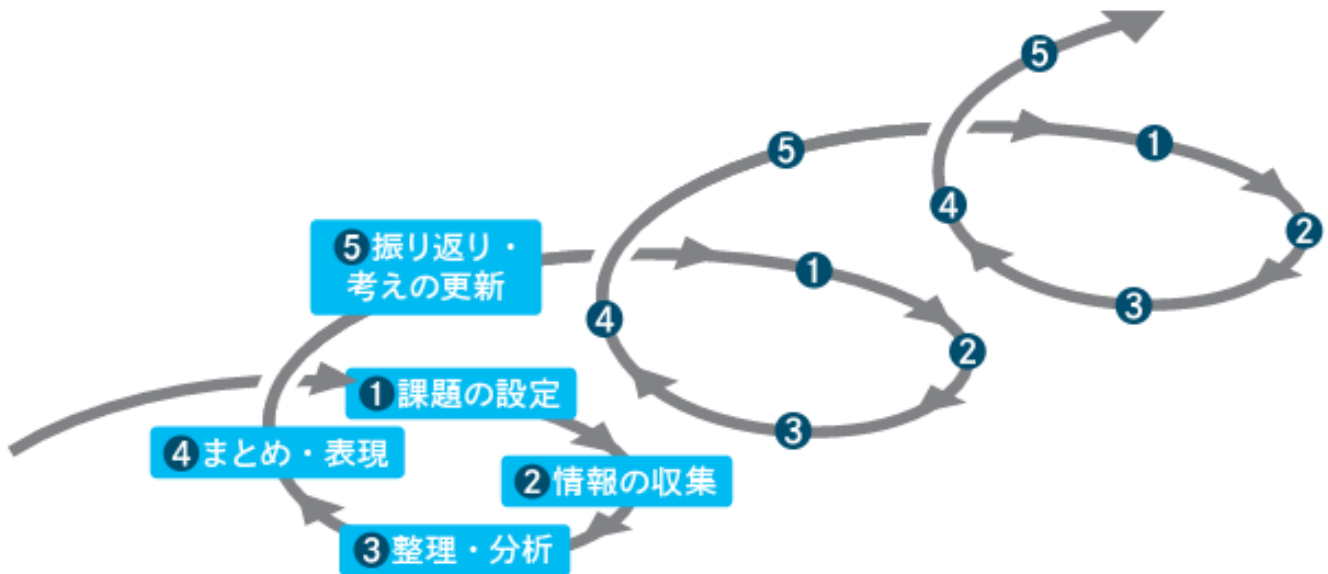
つまり、問題解決型学習⇔探究的な学びと言えます。 そうなれば、私たちは、平成14年の学習指導要領改訂から総合的な学習の時間が始まり、各教科等でも問題解決学習をしていくことになりました。すでに、20年の年月が過ぎ、各教科等の授業もほとんどが問題解決型学習の要素が盛り込まれている。授業観察で見る授業を見ての私の率直な感想です。

まとめ 来年度午後は探究の時間となっていますが、ゼロから作り出すものではないということ。今までの先生たちの実践の中に探究に値するものがほとんどであるということ。ただし、探究学習を導入してその理念である「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成」という視点を根底に据えるということは大切です。

また、「My 探究」を設定していきますが、必ずしも「4つの探究のレベル」の4段階から始めなければいけないということはないこと。児童の実態、発達段階に即して、最も良い選択を私たちで選択していきましょう。

子供に寄り添うということは、適切な課題を児童に提示すること、そして、児童の力を最大限伸ばすということ 私は、そのように理解しています。

図1 探究的な学習における学習の進め方



① 課題の設定	現状と目標とのギャップを捉え、課題意識を持つ、課題点を見いだす。
② 情報の収集	必要な情報を取り出したり、収集したりする。設定された課題に対し、解決プロセスを決定し、必要な情報は何かを考えたり、情報収集を行ったりする。
③ 整理・分析	問題解決を見通して情報を処理する。多様な手法で収集した情報を構造化・可視化し、多様な視点から分析する。
④ まとめ・表現	結論・主張の伝え方を吟味し、他者に伝えたり、議論したりする。
⑤ 振り返り・ 考えの更新	まとめ表現したもの（成果）について、グループ・各自で何ができていて・何ができていないかを把握するとともに、その間のプロセスについても検証し、次に向けて新たな課題を生み出す。